

# 真宗における現代教学の現状と課題

頼 尊 恒 信

## 一 はじめに

本研究においては、真宗大谷派における現代教学の現状と課題について考えていきたい。真宗大谷派の教学は、親鸞教学、蓮如教学、江戸教学、近代教学、現代教学というように時代区分に分けて教学の区分を行うことが多い。もちろん、このような教学区分は、真宗大谷派における真宗教学の一つの側面であり、全く異なった教学が存在するものではない。この教学区分の中で、現代教学だけが、研究方法が確立されておらず、現状と課題が不明確なままである。本研究においては、このような現代教学をめぐる状況の中で、研究方法を明確にし、真宗大谷派における現代教学の指針を明確化する。

また現代教学が親鸞教学、蓮如教学、江戸教学、近代教学などの教学史研究と異なる点は、現代社会の諸問題が即応的に研究課題となる故に、結論が見いだせないという点にある。

しかし、現代教学の視座を明確化することは、宗門における社会問題の受容点を明らかにし、宗派としての社会教化のあり方を明らかにすることに繋がるのである。時代相応の教化手法を研究・実践することは、親鸞が和語聖教を著したり、当時の流行であった今様をモチーフにして和讃を著したりしたように、真宗においては常々行ってきたことであろう。

本研究において、教学と現代社会の諸問題とがどのような関わりがあるのかを明確にし、現代教学の本質を明らかにしていくことは、真宗における教化の質を明確にすることにつながっていくのである。そのことが結果的に真宗の教学が複雑化する現代社会の諸問題の解決に寄与することができるのである。そこに、現代教学のダイナミック性があるのである。

## 二 現代教学の三要素

では、現代教学とはいかなる様相を持つものだろうか。たとえば、大谷派においては、明治時代以降、近代に輩出され

## 真宗における現代教学の現状と課題（頼 尊）

た教学者の教学を「近代教学」と呼び習わしてきた。そのように考えると、現代教学は、現代の教学者の教学を指すのであろうか。また、妙好人のように、現代に生きる篤信者の生きざまやその教えを示すものだろうか。つまり何をもって現代教学の内容となすのかという問題が次に出てくるのである。

この問題については、定説化されていない点が存在する。しかしながら、真宗大谷派において現代教学を公称するにあたって少なくとも次の三つの要素が必須条件となると考える。

## (一) 伝統的教學の教學理解にかなっていること

第一点目としては、伝統的な教學理解と相違しないことである。「現代教学」は、真宗大谷派における教学区分の一つである以上、真宗学として伝統的に考えられてきた教学の根本に合致していることが最低限の条件であろう。そうでなければ、いくら現代教学であるとしても、教団内部の共通の視座として、理解しがたいと言わねばならない。つまり個人々が教学を自分流に理解することになるのであって、教団内の共通理解とならないのである。現代教学として成り立つためには、伝統的教學に合致した教えでなければならないのである。

真宗教学のベースとなる親鸞の救済観は、「地獄に生きることを後悔せず」という生き方そのものである。その「地獄に生きる」という言葉に代表されるような生き方は、「向下的救済観」といえる。それは、一切衆生の存在が、「さとり」への

行を行なう主体から、如来の大悲を受けるものになるという意味において、「さとり」から「救済」へという存在論的転換があるともいえる。つまり、浄土教における「さとり」の本質的転換とは、個人の努力の結果によって証果が開かれるのではなく、証果がすべての人々に、仏から願われ、仏から呼びかけられ、仏から与えられていると教えられていると自覚するところにあるのである。つまり、あらゆる人々を対象とする向下的平等観の視座が、現代社会を見つめる視座として最も重要なのである。

## (二) 時代把握が適切であること

第二点目として、的確な時代把握がなされていることが必要である。真宗大谷派における現代教学は、現代における真宗に帰依したものが、真宗の根本的な教学に従って、物事ありとあらゆるものを見つめ直す視座であるので、その見つめる先の「現代社会の諸問題」の把握の仕方が適切でなければ、見つめ直すという行為そのものが不明確なものになってしまう。また、客観的な時代把握を欠いた視座は、宗教原理主義に陥ってしまう可能性がある。そのような状態になると、もはや、現代教学は真宗教学の一形態ではなく、真宗大谷派という教団の独善的な現代社会への視座となってしまう。

しかしながら、真宗学は的確な時代把握のための社会分析のツールを持ち合わせていない。ここでの現代という時代把

握のためには、社会学や社会福祉学といった社会分析の手法を援用することが必要となってくる。

(三) 現代問題に対して異論を唱えるならば道理にかなっていないべきであること

最後に、現代問題に対して異論を唱えるならば道理にかなっていないべきであることが絶対条件である。時に教団の内部の人々が現代社会の諸問題に向き合おうとするとき、その教団の思想を誇張するがために、通俗的な思想を否定し、その思想より上位にその宗教思想があると主張する場合が少なからずある。ただそれらは、前段で述べた社会分析の手法を用いて現代社会の諸問題を見つめているわけでもないものや、国際的な人権保障の潮流に反しているものも少なくない。むしろ、真宗大谷派における現代教学の視座によって、国際的な潮流に異論がある場合、その視座を明確にすることも大切なことである。しかし、そのことが、道理を離れて、闇雲に国際的動向を否定するものであれば、それは、謙虚に時代社会を把握しているとは言えないのである。

以上の三点が、真宗大谷派における現代教学の指標と言えるであろう。これまで、現代教学の必須条件が不明確なまま、多くの議論がされてきた感が否めない。

真宗における現代教学の現状と課題 (頼 尊)

### 三 人権問題に関する国際的潮流を視野に入れる必要性

第二次世界大戦後すぐに、国連は世界人権宣言を採択、一貫してあらゆる人権問題に取り組んできた。そのなかで、たとえば一九六五年には人種差別撤廃条約を締結し、翌年には自由権規約、ならびに社会権規約を締結した。また、その後も、女性差別撤廃条約、拷問等禁止条約、児童の権利条約、移住労働者権利条約が結ばれ、今世紀に入ってから、障害者権利条約と強制失踪者保護条約が締結されている。また、国連は、この主だった条約の他に宣言や議定書、規定、行動計画など様々な形で一貫して人権擁護に取り組んでいる。

このような国連による人権擁護の取り組みは、国連加盟国であり、当該の条約等に批准していることが条件であるが、現在、人権問題に関する一定のグローバルスタンダードを形成するに至っている。無論、国連の意見形成の中で、キリスト教を思想的背景として持つ国の人権意識が強く反映しているという指摘も少なくない。しかし、国連が一貫してあらゆる人権問題の解決に取り組み、人々の多様性が認められ、共に生きていこうとする社会の形成に大きく貢献し続けてきていることは、学ぶべきことであり、単純に否定すべきものではないのである。

## 真宗における現代教学の現状と課題（頼 尊）

では、日本が国連の条約をはじめとする国際条約に批准すると、日本国内では、条約は、最高法規である日本国憲法の下位におかれる。つまり、憲法、条約、基本法、各法、政省令の順で法的影響力を持つことになる。条約批准を行うことは基本法以下の法が条約に合致したものでなくてはならないと定められている。つまり、条約批准に際しては、条約の主旨に沿った国内法整備を行わなければならないのである。

条約に批准すると、二年以内に国連の条約に関する委員会に政府報告を出すこととなっている。この時、政府は政府報告書を提出するわけであるが、日弁連などの民間団体やNGOなどはパラレルレポート（カウンターレポート）を作成提出するのである。それらの文書をもとに国連の委員会で予備審査され、政府に委員会から事前質問が送られ、政府は回答を行い、本審査に至るのである。本審査の後、委員会が最終見解（総括意見、勧告）を出すのである。以後、五年のサイクルで締約国は委員会に対して政府報告等を提出し審査を繰り返し受けることになる。そのような中でグローバルスタンダード化された人権意識が高まり、醸成されていくのである。

国連による審査は勧告をとまなうものであって、日本においてもまだまだ数多くの課題が残されている。殊に、現代における社会的諸問題を考えていくとき、このような条約の本文や勧告が、人権問題をはじめとする社会問題を考えていく

ときの大きな糸口になることは間違いないことであろう。

そのような中で、人権問題を考えるにあたっての近年のトピックを考えると、当事者参画、権利擁護、アドボカシー、エンパワーメント、インクルージョンというように、いかに社会的弱者といわれる当事者自らが人間としての力強さを回復していくための支援が大切であると言われてきている。

## 四 現代社会と現代教学の両面の視座に基づく教化

真宗大谷派における現代教学の視座をもちいて現代社会の諸問題に向き合うことが出来る方向性が二つ存在する。一つには、宗門内において現代教学の視座から見た現代社会の諸問題に対する宗門の立場を明確に伝えていくという活動が重要になってくる。このことは、宗教学的な表現で述べるならば、既信徒教化に相当する。この既信徒教化と現代教学の視座との関係性を考えるならば、本来的には既信徒は、真宗教学を共有し、共通の信仰的視座を有していると考えられる。つまり、現代教学によって得られた現代社会の諸問題に対する宗門の視座と既信徒の視座は、本来的には、方向性を一とするものであると考えられるかもしれない。

しかしながら、真宗大谷派をはじめとする伝統教団は、近世以降の日本において、寺檀制度が確立し、個人々人として特定の宗教に帰依するというより、「家の宗教」として代々受け

継がれてきた宗教でしかない場合が多い。それ故に、教団の教学と「家の宗教」として代々伝えられ、信じられてきた内容との乖離が存在する場合がある。つまり、現代教学の視座から見た現代社会の諸問題に対する宗門の立場を明確に伝えていくという活動が必要になってくる。また、それと同時に、現代教学によって得られた現代社会の諸問題に対する宗門の視座と既信徒の視座が、相対する可能性もある。それと同時にそのことが、既信徒ならびにあらゆる人々の人権を害するような教化であってはいけない。あくまでも、国際的動向を理解したうえの現代教学に基づく教化である必要がある。

第二に社会的活動である。これについては、宗教学的な表現で述べるならば、未信徒教化に相当する。この未信徒教化の課題とは、現代教学の視座と相反する価値観がある中で、どのように真宗者が活動するかという点である。いずれの価値観の中にあるにせよ、社会的動向と向き合わなければいけない。その「向き合い方」があらゆる人々を対象とする向下的平等観の視座が、現代社会を見つめる視座として必要なのである。また、その視座は、さらには社会の構築という、あらゆる人々を対象とする向下的平等観の視座の具現化に繋がっていくのである。つまり、如来より教えられる絶対的平等観の具現化は、既信徒教化に対して社会的教化といえる。そのような向下的平等観の視座を社会体制の構築として発信する

ことは、あらゆる人々の人権を保障し、あらゆる人々と共生する社会の構築につながるのである。そのような意味においては国際的な人権保障の潮流にも何ら相違しないのである。

## 五 まとめ

これまで、真宗大谷派は様々な声明を出してきたといえる。しかしながら、それらは、政策を批判してきたにすぎなかった。現代教学は、ただ否定的に現代社会を見るだけではない。真宗における現代教学は、社会的教化という社会政策が必然的に随伴するものでなければならぬのである。そこにあらゆる人々と共に生きていくとする向下的平等観の視座の具現化が確実に必要となっていくのである。その視点にこそ、真宗大谷派における現代教学のダイナミズムがあるのである。

〈キーワード〉

真宗、現代教学、人権、向下的平等観、社会的教化

(和歌山赤十字看護専門学校非常勤講師)